

中村光夫全集

第十六卷

筑摩書房

中村光夫全集 第十六卷

昭和四十八年六月三十日発行

著 者 中 村 光 夫

発 行 者 井 上 達 三
東京都千代田区神田小川町二ノ八

発 行 所 筑 摩 書 房
東京都千代田区神田小川町二ノ八

郵便番号 一〇一一九一
電話 東京 七六五一(代表)
振替 東京 四一二二三
印刷 株式会社 精興社
製本 製本株式会社

落丁・乱丁本はお取替いたします

(分類) 1395 (製品) 72516 (出版社) 4604

第十六卷目次

虚実	315
眞の偶像	3
小さなキャベツ	317
パリ・明治五年	328
サン・グラス	350
影	362
アニマル	373
出会	385
大の虫	397
あとがき	418
平和の死	419
後記	667

解題	677
解説	669
	山本健吉

小説
(二)

質の偶像

I

新井教授のノート

長田秋濤は完全に忘れられてゐる。友人たちに「秋濤を研究してゐる」といつても、彼の名を知つてゐる者はほとんどゐない。大概文学の愛好家で、なかには国文学者もゐるのだが。

国会図書館にも、彼の著作は半分もそろつてゐない。翻訳ながら彼の主著である「椿姫」も、彼がフランスから帰朝した当時、大きな抱負で刊行した雑誌「白百合」も、見当らない。

「椿姫」は、紅葉訳の「鐘樓守」などと同様早稲田大学出版部の文学叢書の一冊であるが、ほかの本はあるのに、どうしたものか、これだけがなく、秋濤の現在おかれた地位を象徴するやうである。

明治文壇で、秋濤の地位が一時はかなり高かつたことは、江見水蔭の「自己中心・明治文壇史」を見てもわかる。明治三十三年の二月、江見らの編集した週刊紙「太平洋」紙上にかかげられた「文士内閣大見立」によると、秋濤は紅葉の大蔵大臣、逍遙の文部大臣、露伴の海軍大臣などと並んで、外務大臣に擬せられてゐる。かういふ「見立」があまり信用できないのは、むかしも変わるまいが、まるきり人気のない文士でなかつたことはこれだけでも察せられる。

演劇に関する業績は別としても、世に先んじて、モウパッサンを原語から訳したり、紅葉はじめ硯友社の作家たちに外国文学の知識を供給し、紅葉と「寒牡丹」「鐘樓守」を共訳した秋濤の仕事は、文壇におけるだけでも、一種の先駆者として、もつとみとめられてよい筈なのだが、硯友社と深くつきあひすぎたせゐるか、後世の自然主

義者たちから、一括して敵視されてしまった。

当時の文壇人の彼に関する記述には（別に自然主義の同調者でなくとも）何か肌の合はぬ異分子にたいする反感が見られる。

彼の派手な生活、政治家との密接なつながり、世間を憚らぬ遊蕩など、「人」を通じて作品を批評したがる我国の文壇の、彼にたいする評価に重大な影響を及ぼしてゐる。

曠外の「百物語」は、その興味ある一例である。

この短篇は、彼がある破産しかけた富豪の催した百物語の会にふとした好奇心から出席し、この雑駁な会合を冷然と眺めてゐる主人の飾曆屋と、彼に「看護婦」のやうにつきそつてゐる芸者の太郎に自分と同じ「傍観者」を見出し、「他郷で故人に逢ふやうな」感情を味ふといふ筋の、小説といふより覚書とよびたいものだが、そこに次のやうな回想が挿入されてゐる。

「此時より二年程前かと思ふ。湖月に宴会があつて行つて見ると、紅葉君はじめ、硯友社の人達が、客の中で最多数を占めてゐた。……僕はふいと床の間の方を見ると、一座は大抵縞物を着てゐるのに、黒羽二重の紋付と云ふ異様な出立をした長田秋濤君が床柱に倚り掛かつて、下太りの血色の好い顔をして、自分の前に据わつてゐる若い芸者と話をしてゐた。その芸者は少し体を屈めて据わつて、沈んだ調子の静かな声で、只の娘らしい話振をしてゐたが、島田に結つた髪の毛や、頬のふつくりした顔が、いかにも可哀らしいので、僕が傍の人に名を聞いて見たら、『君まだ太郎を知らないのですか』と、その人がさも驚いたやうな返事をした。」

作者の興味の中心はむろん太郎にある。「太郎が東京で最も美しい芸者だと云ふ事」は「深く人心に銘記せられてゐる」ことであり、「尾崎紅葉君が頰杖を衝いた写真を書した時、あれは太郎の真似をしたのだと、みんなが云つたほど、太郎の写真は世間に広まつてゐたのである。」と彼は書き添へてゐる。

秋濤はただ彼女の話相手として登場するだけなのだが、ここで彼の名をあげ、容貌や服装を描写する必要が果してあつたらうか。この短篇のモデルと云はれる、鹿島清兵衛やばん太らの主要人物を変名にしなげら、ここで

わざわざ彼の本名をだす理由は、少なくとも小説作法上はなかつたらう。太郎と話してゐた男は、硯友社のひとりとしておいても、または「黒紋付の肥つた男」でもことたりた筈である。

「百物語」が発表されたのは明治四十四年秋であり、紅葉は三十六年十月に胃癌で亡くなつてゐるから、「床の間に梅と水仙の生けてある頃の寒い夜の」宴会がその年の冬だとしても、その間には十年近い歳月の距りがある。「余程年も立つてゐるので、記憶が稍おぼろげになつてはゐるが又却てそれが為めに、或る廉々がアクサンチュエエせられて」と鷗外自身この書出しで云ふが、秋濤の記憶がここで「強調」されてゐるのは、彼にたいして鷗外の抱かざるを得なかつた反撥をまじへた同類意識のせりであらう。

洋行がへりの資格で文壇にうつて出た鷗外は、数年後に同じやうな経路で世に出た秋濤には、いやでも関心をいだかざるを得なかつた筈だ。（鷗外の「しがらみ草紙」創刊と「舞姫」執筆は明治二十二年であり、秋濤が「早稲田文学」に「仏国演劇現況」を発表したのは明治二十七年であつた。）

また常盤会などを通じて山県有朋に接近をはかつてゐた鷗外は、秋濤が子供のときから山県家に入入りし、一時は養子に望まれたことを知つてゐたかも知れない。

津和野の医者の子にすぎなかつた鷗外とちがつて、直参の新知識を父に持ち、その縁故で、伊藤博文とはとくに親しく、西園寺などにも知られてゐた秋濤は、演劇改良のやうな、政界と文壇劇界を結ぶ仕事に世話役をつとめ、軍人としてやはり文壇と両棲類の生活をおくつてゐた鷗外の眼には、ときには羨むべき驕児と映つた筈である。

小倉から東京にもどつたころの鷗外が、生涯を通じての谷底にゐたと反対に、同じ明治三十五年前後は、秋濤にとつて得意の時期であつた。

当時文壇の中心であつた硯友社の会合に、野暮な黒紋付姿で出席し、床柱を背負つて太郎をひきつけてゐた秋濤を、鷗外がどんな眼で見たか想像にかたくない。

明治四十年代になると、事情は逆転する。「百物語」を書いた頃の鷗外はすでに「スバル」によつて華々しい

第二の創作期を迎へ、八方にその活動の触手をのばし、若い世代の敬意の的であつた。

これに反して、日露戦争中はゆる露探事件にまきこまれ、刑事被告人とされた秋濤は、それによつて世間をせばめ、さらに文壇的にも、硯友社の凋落、自然主義の勃興など、悪条件が重なつて、東京にゐられなくなり、神戸郊外に隠棲して、ときには生計に苦しみながら、わづかに劇界とのつながりだけを保つてゐた。

それをはるかに見やりながら、彼の「下太りの血色の好い顔」を描写した鷗外に、ささやかな復讐の快感がなかつたとは云へないだらう。

この神戸の西郊垂水の借家で、秋濤は四十四年の生涯を終る。大正四年（一九一五年）十二月二十五日のことである。この年の春から夏にかけて彼は南洋を巡遊し、かねて持論の南方発展策を実現する第一歩として、マレー半島に経営したゴム園を視察し、八月帰朝したが、間もなく脳溢血に倒れ、一時小康を得て、遺著「函南録」を口述したが、ふたたび起たなかつた。

辞世めいたものはのこさなかつたが、病中吟として、左の漢詩が伝へられてゐる。

湄公之月古城の花

詩賦吟遊家を思はず

落托又病褥の客と為り

満窓の秋雨感更に多し

彼の友人和田垣謙三はこれを「調や凄愴、殊に結句人をしてまた感転た深からしむ」と評してゐる。

今年、すなはち昭和四十年は彼の歿後五十年にあたる。彼と語を交へた者は、いまではみな白髪のお翁老婆し

かるない。それも秋濤と同年輩といふわけではなく、晩年の彼に青年として近づいた人々である。

そのひとりに、かつて秋濤追悼のために結成された秋濤会の世話人であり、いまま秋濤の弟子と名乗る安川老人がゐる。秋濤会からは、二冊のパンフレットが、ひとつは彼の死の直後、他は二十年後に出版されてゐるが、これは両方とも彼の執筆になるもので、そこに秋濤が一方ならぬ敬意と愛情をこめて描かれてゐる。

老人はのち大杉栄などに近づき、アナキストとして一部の人に知られてゐたが、その後消息を絶ち、生死不明のやうに云はれてゐた。最近ある小雑誌に秋濤の回想を書いてゐたので、手紙をだすと、幸ひに返事がもらへた。

正月四日の曇つた寒い午後、小田急で一時間ほど乗つた駅から、田舎くさい新年の飾りつけをした街にでて、白い晴着の娘達が目立つなかを、略図をたよりに歩いて行くと、町はづれの丘の起伏の上に高圧線がみえてきた。その鉄塔のひとつの下に安川老人の寄寓してゐる家がある筈だつた。

雑誌の発行所に電話で彼の住所をとひあはせると、社の幹部らしい男が、その老人なら以前はときどき顔をみせたが近頃はこない、病氣といふ噂のやうだ、住所を知つてゐる社員はいま外出してゐるから、もう一度電話してほしいといふ返事だつた。

病氣なら、急いの方がよいかも知れないと、正月三ヶ日すぎれば訪ねてきてよいといふ返事をもらつて、すぐでかけてきたわけであつた。

安川老人は、同じ形の平家でならんだ建売住宅の、玄関のすぐわきの三畳で、古びた木綿の寢床の上におきなほつてむかへてくれた。

小さな火鉢のおかれた部屋は、日が当つて暖かだつた。血色のよい丸顔で、無邪気な笑顔をするが、眼がときどき鋭く光る。

枕許には箱膳が蓋をしておいてあり、寒い間はこの部屋にこもりきりでゐるといふことだつた。

「秋濤をしらべてどうなさるんです。」

老人は初対面の挨拶もすまぬうちに切口上で云ふ。

「さあ、どうといふあてはないんですが。」

これを下手なごまかしとつたらしく、

「あんな人の伝記を書いたつてうれやしませんよ。」

と重ねてきりこんでくる。

亡くなつた作家の調査をしてゐると、かういふ出方を周囲の人々にされることがめづらしくない。彼等是一種のはにかみ、神聖な思ひ出を無益な好奇心の土足にかけられまいとする警戒心から、かういふ態度に出、下手をすれば、自分だけが握つてゐる故人への通路を容赦なくとぎしてしまふ。

露骨な調査意識をだしたり、大袈裟な身振りで、故人に敬意を表したりすることはかういふとき禁物である。

秋濤の仕事は、明治時代のフランス文学の影響を語る場合、逸することのできない重味を持つてゐる。彼の仕事は自己の趣味に偏した点があるために、後世から正当な評価を得てゐないが、それだけに現代から見直す余地が多いやうに思ふ、こんな風にできるだけ穩当な讃辞を並べて、納得をもとめると、老人の表情は、やはらいできた。

「でも、どうでせうかね、秋濤の文学者としての価値は。芝居はともかく好きでしたけど。道楽でやつてたやうなところがありませんか。」

蒲団の上で腕ぐみをしながら、念をおすやうに問ひかへしてくる。

「それでいいんぢやありませんか。演劇も小説も秋濤と同時代の人とはみな道楽でやつてます。自然主義がそれをむげに否定しましたけど、結局は道楽ぢやないんですか、文学は。」

「さうですか。あたしは自然主義の方だから、そこところはよくわからないけど。」

肉親をほめられたやうにうれながら、老人は微笑した。

彼と秋濤とのつながりは、神戸のフランス領事の主催した仏語講習会で秋濤にフランス語を習ったのがきっかけで、やがて秋濤は学生たちに、時間の無駄を省くために自宅で授業したいと云ひだし、授業より酒の相手をする方が多くなる。

「学生はよろこんだでせうね。」

老人はにやりとして、

「しかも妾宅ですからね。花隈のまんなかにある。出入りは便利だし、おかみさんはもてなしがいいし、みんな気分で行入りしたもんです。」

しかしフランス語の授業はわりにしつかりやつた。時間はみじかくても、実力があるので聞きごたへのある講義だった。

「フランス語はできたんですね、それぢや。」

「まあ、本場仕込みですから、立派なものでした。学生たちもだからわりと心からなついてゐました。馬が乗り手の上手下手を見合わせるやうなもので、教師の実力はすぐ生徒にはわかりますからね。」

「それで、妾宅のひとは芸者ですか。」

「ええ、ぼん太といつて、勝気な女でした。秋濤の前には、沢村なんとかいふ役者とわけがあつて、一枝さんもどつちの子かわからんと云はれたもんです。」

「一枝？」

「ええ、秋濤の子ですよ、ぼん太との間にできて、四つかそこらでなくなつた。『凶南録』にでてるでせう、『洗髪寺の盃蘭盆』といふ題で。」

「さうですか。」

「ひどく可愛がつてました、秋濤は。奥さんとのあひだに子供がなかつたし。死なれた翌年に南洋へ行つたのも、

寂しさを紛らすためぢやなかつたでせうか。」

老人はなぜか力をこめて云つた。出生の疑はしい子供を溺愛したところに、秋濤の秋濤らしさを見てゐるのかも知れない。

「垂水にはあまり帰らなかつたんですか。」

「ええ、汽車で行く郊外でしたからね。でもときどきは帰りました。汽車は必ず一等にのるんです。それも切符を買つたことがないんだから面白いでせう。垂水でも神戸でも駅長を手なづけてしまひましてね。改札口を通らずに駅長室を通つて乗り降りするんです、大威張りで。汽車賃だつてないことがざらにあつたでせうがね。」

「それで奥さんは何も云はないんですか。」

幾日も家をあけ、無一文で帰つてくる夫に、細君が抱く感情は明治時代でもかはりない筈である。

「さうですね、何しろ東京にゐたころからさんざ苦勞してきた人ですから、いまさらどうつてことはなかつたでせう。あたしもよく御眼にかかりました。ぼん太なんかよりよつほど美人で落着いた人でした。内心は面白くなかつたでせうけどね。」

老人はむかしの所行を恥ぢるやうに、首をすくめた。

「大人物ですね。」

「やはり県知事の娘ですからね。芸者なんかを相手に焼餅をやけば身分にかかはるといふ誇りを持つてたんでせう。秋濤も一枝がもう少し大きくなつたら、本宅へ引きとるつもりでした。花隈ぢや教育上わるいから。」

「なるほど、身のちがひですか。」

「よくできてましたね、明治時代は。」老人は微笑して、「秋濤なんかも奥さんには苦勞のかけ放しでも、家のなかぢや威張つてました。まるで殿様で。」

「えらいものですね。」

「ものによだはらない性質でしたから。つけ焼刃ぢやああは行きません。」